
神に見捨てられたのか？

トウヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神に見捨てられたのか？

【Nコード】

N11880

【作者名】

トウヤ

【あらすじ】

人間と神 それらが共に生きることが許されない。

故に人間が神の世界に、神が人間の世界に入ることが禁忌である。

ある時、一人の神が人間の世界へ堕ちてしまう。

そこからだ……全てが狂いだしたのは。

001 眞実を知る者は慈悲深い少女

人間と神。絶対的な格の違いを思わせるそれらは、同じ世界に存在してはならない。

前者が住まう人間界、後者が住まう天界　交じりあうことは出来ないのだ。

十月四日午前三時二分十五秒。

この時、一人の神が誤って地上に墮ちてしまった。

神が人間の世界に存在することは、一秒たりとも、許されはしない。

この世の創始者　おおかみ大神は、墮ちてしまった一人の神が天界に戻った後、人間界の時間のリセットを行使した。

緊急手段である『時間のリセット』　単に時間を戻すだけである。即ち、神が墮ちる前の時間に戻すということだ。

十月四日午前三時三十分一秒。

時は戻り、神が墮ちたという失態は、天界だけの事実となった。

「へえーこんな情報あったのか。うわっ、マジかよ。……明日雨が
あー、今日は快晴だったのになあ」

十月四日午前一時。

パソコンの液晶画面だけが唯一の明かりとなっている薄暗い部屋。
そこで、ぶつぶつと独り言を呟きながら、パソコンを見つめる奇

異な男　それ即ち俺である。名前は忌崎龍だ。

俺は半目で、画面に映った文字列を目で追いながら、時に笑ったり顔をしかめたりと、独り喜怒哀楽な表情を見せていた。

「　龍。そろそろ寝た方がいいんじゃないのか」

ピ、という効果音と共に画面に表示された文章。

それを見て、俺は苦笑し、マイク付きヘッドフォンを指で調節した。

「松岡さんも人のこと言えないだろー。明日は仕事って言ってませんでしたっけ？」

わざと、おどけた調子で喋ってみる。

これはボイスチャットというもので、一方がキーボードで文字を送り、もう一方がマイクで受け答える。もちろん、その逆も、お互いがボイスでも可。

通話相手の松岡さんは、俺のいつこ上。俺が高校三年だから、彼は大学一年だ。

「　俺の仕事は始まるのが遅いからいいんだよ。お前は五年ぶりに妹さんと会うんだろ。朝早いことを考えたら、今寝といた方がいいだろう」

再び表示された文章を見、俺はそれを思い出した。

松岡さんの言うとおり、明日　否、今日か。朝早くに、県外の実家で暮らしていた妹が、我が家に遊びに来る予定なのだ。

何故そんな大事なことを忘れてたんだ、と俺は嘆息した。　　まったく……五年ぶりだぞ、五年ぶり……。松岡さんの言うとおり、さっさと寝ないと、起きれなくなるな。

「じゃあ、俺寝ますよ。松岡さんも早めにね」

「はいよ。バイビー」

別れの挨拶を交わし、俺はヘッドホンを外した。

電源ボタンを押し、パソコンを終了させると、凄まじい眠気に襲われた。

元々明かりになっていたのがパソコンの液晶画面だけで、電源が切れると部屋は暗黒に包まれ、それが眠気を促進させたみたいだ。

しかし、このままデスクで寝た……ら……。

「ムリ……」

起き上がることは、正直無理だった。

目を瞑ると、風船の空気が抜けるように力が入らなくなり、意識がもつろつと

家の前に停まった宅配トラックの轟音で目が覚める。

眠い目を擦りながら部屋を見回すと、一時過ぎを刻む目覚まし時計が目に入った。

「えっ、一時？ 一時って……え、えっ？ あれ？」

全てを把握した俺は、飛び上がった。その拍子に右足の小指をタンスの角にぶついたり、携帯充電器のコードに足を引っかけたり、舌を思い切り噛んだり等々……かなり悲惨な目に遭っていた。泣きたい。

「ううがあつ。いつてえ……！」

噛んだ舌の痛みに悶々とする間もなく、目覚まし時計が左足の小指に落下した。本当に泣きたい。……しかし俺は男だ。零れ落ちそうな涙を必死に目にしまふ努力をした。

何とか痛みと泣きたい衝動は収まった。しかし、一難去ってまた一難とは、まさにこのこと。痛みと涙の後にやって来たのは、焦りだった。

現在の時刻 午後一時二十五分。妹が訪問するのは朝八時。これは大遅刻を超えたスーパー大遅刻だ。

「のわアっ！ いつつー！」

急いで下の階へ向かおうとするも、俺は床に脱ぎ散らかしていた靴下を踏んで横転してしまった。今度は耐える前に涙が出てきた。

満身創痍になりながらも、何とか部屋を出る。その後も、俺は騒々しい音を家中に響かせながら、一階のリビングに行く為に階段を駆け下りていった。

リビング行くだけで体中がボロボロになるってどうなんだろう。

俺はそう思いながら、リビングでテレビを見ている親父に話しかけた……のだが。

返事はなかった。

「おい、無視すんなよ親父。あまりにも起きるのが遅いから怒っちゃいましたかー？ つーかアキ（妹）はどうしたよ。まだ来てねーのか」

返事はない。

親父はまるで屍になったかのように、俺の問いかけを無視し、呆然とテレビの野球中継を眺めていた。

おいおい、遂に家族内のいじめが始まったのか　そう思ったが、俺は俺が親父にいじめられる要因を見出すことが出来なかった。

「親父！　く、そ、お、や、じ！」

ガン無視だ。

何かがおかしい……。そもそも、何故妹が来てないんだ。

まさか、新手のドッキリか？　ドッキリなのか？　……んな馬鹿な。

「そうだ。母さん！　母さんは？」

俺はリビングを飛び出し、台所へ向かった。

廊下を走っていると、料理をする音が耳に入り、俺は安堵の息を漏らしながら、台所で昼食を作っている母さんに話しかけた。

しかし、返事はなかった。

「母さん、母さん！」

無言で料理を続ける母親。

妹がいない……。両親に無視される……。悪い夢かと思い、咄嗟に自分の頬をつねってみた。痛い。

「……夢じゃないのか。何だ、これ」

次の瞬間、俺は悲鳴を上げた。

母さんが俺に向かって歩き出し、その体をすり抜けたのだ。肌と肌が触れ合う感覚、それが全く感じられなかった。

「何だ、何だよ！ どうしちまったんだよ」

俺は息を荒くしながら、自室へと駆け戻った。

部屋に戻ると、あることに気づいた。

デスクに置いていた携帯電話。そのバイブが起動している。

慌てて携帯を取り、通話相手を見ると『非通知』になっていた。

怪しい。怪しいが、両親に無視され、触れることも出来ない今、

頼れるのは存在が消えかけている俺に電話をかけてきた……この人だけだ。

通話ボタンを押し、恐る恐る携帯を耳に当てる。

「も、もしもし……」

「あ、通じた。忌崎龍さん、聞こえますか？」

俺は電話をかけてきたのは女神か、と一瞬思ってしまった。

聞こえてきたのは、現在起きている超常現象を忘れさせてくれるような、美しく透き通った、天使とでも言ってもいい女性の声だった。何故この人が俺の名前を知っているんだ、という疑問をかき消すぐらい、綺麗で印象的な声だった。

俺は上手く喋ることが出来ず、

「ああああの、えっと……あなた、誰、だ……？」

何とも失礼な対応をしてしまった。

「落ち着いて聞いて下さい。私はガルーダと申します。天界からなので、ノイズが入るかもです。もし聞き取れなかったら、すぐ言って下さいね」

混乱する俺に、女性は相変わらず綺麗な声で、やや早口に説明した。

日常的に聞き慣れない単語が出てきて、俺には何が何だか理解出来なかったが。

何も返事しないのもあれなので、とりあえず曖昧に応えてみる。

「いえ、多分聞こえます、けど……」

「そうですか。よかった。あ、ちなみに、これはアラシヤ大佐の目を盗んでの連絡です。いつ切れるか分かりません。ご了承下さいね」

意味が分からない。てんかいつて何だ。何処か遠い場所なのか。そもそもガルードって……。外国人の名前っぽいけど、喋り方からして日本人だ。それとも何かと聞き間違えたか？ じゃあ、てんかいつても俺の聞き間違えか？ ……でも、アラシヤ大佐って言うてなかったか。大佐って、つまり軍人なのか？

「やっぱり混乱してますよね……？ 突然人に触れなくなったり、無視されたりするなんて、そりゃ気がおかしくなりますよ……」

今、ガルードという女性が言った台詞を、俺は聞き逃さなかった。俺は慌てて食いついた。

「それ、どういうことですか!？」

「ああ、えと、どこからご説明すればいいやらで……。貴方が私の言葉を信じるかどうかでご説明する意味も……」

「信じる、信じます!」

「 分かりました。では、貴方の身に何が起こったのか、ご説明
します」

俺は唾を飲み、彼女が言葉を紡ぐのを待った。

次の瞬間 俺は驚愕の事態に耳を疑うことになる。

「 貴方が存在している世界は、もう人間の世界ではありません」

002 不条理に抗うは別離した兄妹

貴方の存在する世界は、もう人間の世界ではありません。

俺は言葉を失った。

冷静に考えれば、馬鹿馬鹿しい話だ。しかし、少しでも情報がほしいこの状況では、これは信用せざるを得ない。

信用した後頭に浮かんだものは 恐怖。

「人間の世界じゃないって……どういうことだよッ!？」

震える声で怒鳴り散らす。

初対面なのに、とか、そんなことを気にする余裕は毛ほどもない。

「 神と人間、共存許されず。人間が神の世界へ、もしくは神が人間の世界に現れた場合、世界の秩序は崩壊するとされています。数時間前 私の上司であるアラシヤ大佐が、誤って人間の世界に堕ちてしまいました」

この馬鹿らしい話に留まらず、神をも信じろってことか？

いや、待て。それだと、今俺が話している相手 ガルーダは…

…。

俺は恐る恐る、訊いてみた。

貴方は、神なのか……と。

「 はい。私は、天界に住まう神 ガルーダ少尉です」

神を名乗った彼女の返答は、あまりにも軽い口調だった。

しかし、俺が疑問に感じたのは、彼女が神か否か、ということだ。

はない。彼女の名に付いている肩書きだ。

「少尉って、まるで軍人じゃないか……？」

「神の世界である天界にも、地位、階級というものがあるのですよ。人間の階級と同じなのは、多分偶然です。私には難しいことは分からないので」

「いや、そんなことはどうでもいい。とにかく、今俺が置かれている状況を教えてくれないか」

「ええ。簡単に言うतすね、忌崎龍さんは、時間のリセットについて行けなかった人間なのですよ」

「時間の……リセット？　なんだ、それ」

「そのままの意味です。聞き慣れない言葉ばかりで混乱するかもですが、聞いた通りで捉えて下さい」

「……ゲームとかについてるリセット機能ってことか？」

「その通りです。えと、つまりですね、私たちの中で一番偉い人が、神が堕ちたことをなかつたことにしました。その為には、貴方の存在する世界の時間を戻す他、手段がなかつたのです」

「なら、俺はその……リセットされなかつた人間……？」

「はい」

あっさりと肯定するガルーダ少尉。

あまりに現実離れした話すぎて、俺は何も言えずにいた。

しばらく、沈黙が続く。

「私がお伝えしたいことは、この話の先です」

沈黙を破ったのは、ガルーダ少尉だった。

俺は深呼吸をして気持ちを静め、ベッドに腰を下ろした。さつきみたいに、動揺しないよう、心を引き締める。

「なんだ？」

なるべく落ち着き払っているように見せる。

気持ち지가ガタガタなのがガルーダ少尉に見破られれば、余計な心配を与えてしまいそうだし。

「本当は、こんなことをしちゃいけないんですよ……。私が人間と電話でお話するなんて……」

唐突に、小声に切り替えるガルーダ少尉。

……神が人間と共存してはいけないとされているんだ。通話なんて、もつての外だろうな。

それにしても、何故彼女は俺にこんなことを教えてくれたのだろうか。

訊いてみよう。

「それは……内緒です」

「へ？」

「 ああう、もうっ！ とにかく、貴方はその世界から出ないと、消えちゃうんですよ！ その体も、皆からの記憶からも、何もかもが、です！」

「 へ！？ 」

おいおいおいおい！ 何か凄く怖い話聞かされた気がするぞ！
存在が消えるって……。このままだと俺、いなくなるってことじやねーか！

「 何か助かる方法はないのか！？ 」

「 お、落ち着いて下さい……。今からそれを説明します 」

！ …… そうだ、彼女の言う通り、落ち着け俺。
もう一度、深呼吸だ。

日曜日。午前六時。何とも目覚めの良い朝。

今日は、お兄ちゃんに会える。

五年ぶりだ。元気にしているだろうか。

私は私服に着替えると、台所に入った。

朝食を作っている叔母 お母さんのお姉さんに挨拶したくて。

「 おばさん、おはよう！ 今日は早起きしたよっ。お兄ちゃんに会う時に眠くなっちゃったらダメだもんね 」

私は後ろから、非常に高いテンションで話しかけた。
そんな恥ずかしい私の行動とは裏腹に、おばさんからの返事はなかった。

「……おばさん、どうしたの……？ おばさんってば！」

幾ら呼んでも、無反応。

居候の身だから、嫌われちゃったのかな……？

でも、とても優しいヒトだし、無視するなんてことしない筈なんだけど。

「あ、あれっ？」

おばさんの肩に、そーっと手を伸ばしたけど……。
触れない。
手がすり抜けた。

「ええっ!？」

予想外の出来事に驚き、思わず後ろに置かれていたテーブルにぶつかってしまった。
テーブル上に大量にあった茶菓子が床に落ち、騒々しい音を立てる。

「あらあら、どうしたのかしら」

「ひゃあっ!？」

おばさんが振り返り、私に手を伸ばしたと思ったら、その手は体

を抜け、茶菓子を掴んだ。

おばさんは、茶菓子が落ちた理由が分からないのか、眉をひそめ、首を傾げた。

私は家を飛び出し、道行く人に声をかけた。

返事はない。そして、やはり触れることができない。

……私、ここに存在してないの……？

誰とも話せず、触れられず、過ごさなくてはならないの……？

嫌だ。そんなの、嫌だ。

お兄ちゃんとも話せなくなるなんて嫌だ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1188o/>

神に見捨てられたのか？

2010年11月3日01時27分発行